

異世界マンガ作画大賞 課題作品3（男子向け）

◆概要

とある高校のクラス全員が異世界の神によって召喚された。

クラスメイトたちが神から【剣技(極)】や【高速魔力回復】などの強力なスキルを受け取る中、九条 祐真に与えられたのは【特許権】。それを与えた女神でも、何が出来るかよく分からないという。

魔王と戦う戦力になれないからという理由で、祐真はクラスメイトたちに置いて行かれてしまう。実は誰よりも異世界での活躍を夢見ていたため彼は深く絶望するが、祐真が得たのは、使い方次第でこの世界のルールすら書き換え可能なスキルだった!?

◆キャラクター設定

○九条 祐真（くじょう ゆうま）

男性、高校生

特徴：職業-魔法使い、スキル-特許権を持つ異世界転移者。中二男子だったら誰しも考える「もし自分が魔法を使えたら、こんな強い魔法を使う」という妄想より生み出された呪文を綴ったノート・暗黒呪文集《ダークネス オブ スキルズ》を用いて、様々な最強魔法を開発している。

○リエル

女性、ハーフエルフ

特徴：大きな目。美しい金色の髪。肌は透き通るように白く綺麗。肩くらいまでの長さの金髪から少し尖がった耳が見えている。絶世の美少女だった。元の世界じゃ、アイドルでもここまで可愛い子はほとんどいない。エルフ耳だが、ハーフエルフのため耳の長さは短い。

○アイリス

スキル特許権のガイドライン（スキルの使い方を教えてくれるスキル）

特徴：実体はなく、祐真にだけ聞こえる声で話す。スマートフォンに搭載されたアシスタント機能と似たような感じだが、機械的な音声ではなく、可愛らしい女性の声をしている。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

「ねえ、アイリス。これ、何とかならないかな？」

俺は額部分に深紅の角を生やした兎たちに襲われていた。

角兎っていう魔物らしい。

5匹の角兎が俺に突撃して来ては、逃げて行く。そして距離をとって加速し、また俺に襲い掛かってくる。

俺はというと、冥府之鎧（魔力量に応じて物理防御力と魔法防御力を向上させる魔法）が発動して物防も魔防も10万近くになっているので、こんな攻撃痛くない。見た目は尖がっていて刺されたらすごく痛そうな角が俺に向かってくるのに、いざ当たってみると全く痛くない。大きな違和感がある。

『なんとかしろと申されましても……。角兎くらいでしたら、初級攻撃魔法で討伐可能です』

アイリスには自分で対処しろって言われてしまった。

「俺がこいつらの縄張りに入っちゃったから、攻撃されてるんだよね？　なんかそれを倒しちゃうの、申し訳ないなーって」

『これは魔物ですよ、祐真様。人族の敵です』

そ、そうは言っても……。

こんな至近距離で生き物を殺すなんて、ちょっと無理なんですけど。

はじめて雷哮を使った時、俺は150を超える魔物を倒している。でもアレは、そこに魔物がいるって知らずに魔法を放った結果だった。

その後、俺に襲い掛かってきた魔人を倒したけど、あの時は殺さなきゃ俺が殺されるって思いが強かったからなんとかあった。実際に倒す時も、火炎牢獄で魔人の姿は見えていなかった。

それにアイリスが倒せて、『魔物を消滅させろ』って指示を出してくれたから。

角兎を倒さなくても、俺が殺されるわけじゃない。しかも倒すとしたら、俺に何度も突撃してくるこいつらを近距離で殺さなきゃいけない。

改めて魔物を殺すという行為に考えさせられていた。

本当に殺さなきゃいけないのか？ こんなやつら放っておいても良いだろ。こいつらの縄張りを出れば襲ってこないんだ。俺が移動すれば良い。

そんなことを考えていた。

『……角兎は繁殖力が高く、放置すれば数を急増させてしまいます。この魔物が数を増やせば、角兎を餌にするもっと強い魔物も増えてしまう。ですからこれは倒すべき敵なのです。祐真様、魔法を使い角兎を討伐してください』

アイリスが俺に指示を出してくれた。

優しいな。

俺が指示されたからって言い訳にすることが分かっている。彼女のせいにするって分かっているのに、わざわざ俺に魔法を使えと指示してくれた。

『少し前方に走ってください』

「了解！」

言われた通り走り出した。

角兎たちが走って追いかけてくる。

『今です。反転して火炎弾を！ 詠唱は不要です』

「火炎弾！」

俺は魔法を放った。

言われた通り詠唱もしなかった。

必要魔攻 10 の初級攻撃魔法。

レベル 1 の魔法使いでも使える魔法だ。

俺の手から放たれた火炎弾は角兎たちに向かって飛び――

その着弾地点から前方およそ 100 メートルを灼熱地獄に変えた。

「えっ!? な、なんで? 俺、火炎弾使ったよね!？」

初級魔法なのに、威力が上級攻撃魔法を超えていた。

『魔力が増えて魔法攻撃力が以前とは比べ物にならなくなっているのに、魔力コントロールをミスしてこうなるのも仕方ありません』

「そ、そうなんだ」

『それよりこのままでは森が大火事になってしまいます。以前、魔人を討伐した後のように、水龍弾で消火してください』

「あっ、そうだね！」

言われた通り、水魔法で燃えている木々を消火していった。

アイリスの指示通りに動いたからか、魔物を殺したことに対する心の負担はなかったような気がする。魔法の威力が異常で、そっちに驚いたってのもある。

もしかしたら彼女は、俺が使う火炎弾の威力がこうなることも知っていたんじゃないかな。そのまま何も言わなければ、俺は以前の感覚で魔法を使う。その効果に驚いて、生き物を殺したことへの罪の意識が軽減されると。

考えすぎかな。

でも、感謝はしておこう。

「アイリス、ありがとう」

『どういたしまして。マスターの心の平静を維持するのも、ガイドラインである私の務め。これからも祐真様のお世話は私がさせていただきます』

「うん、よろしく」

こうして俺は、はじめて至近距離で魔物を討伐するという経験を積んだ。

街に向かって移動している。

特にこれと言った問題はない。

「グモオオオオ！」

おぞましい雄叫びを上げながら、豚の頭部と 2メートルを超える巨体を持つ魔物。オークが俺に襲い掛かってくる。

オークがその手に持つ棍棒を俺に振り下ろした。

「グ、グモっ!？」

俺の頭に当たって砕けた棍棒を見て、オークは驚いていた。

さっきから俺は 10 体ほどのオークに囲まれ、攻撃を受けている。

でも大丈夫。

特に問題はない。

冥府之鎧の効果で、ダメージは一切受けない。衣服にも俺のステータスが反映されるらしく、攻撃を受けても破れたりすることはなかった。

『オークは危険度 C ランクに分類される魔物です。F ランクの角兎と比べると、かなり強い魔物。しかし知能は低く、畏にかければ討伐は難しくありません』

「畏は要らないんじゃないかな」

『祐真様には不要ですね』

「こいつら、倒した方が良い？」

『雄のオークは異種族の雌を襲い、子を産ませます。人族にとっては討伐重要度が高い魔物。10 体もいれば小さな村なら壊滅させられてしまいますから、この場で討伐をお願いします』

「了解！ また指示をよろしく」

『はい。初級の水属性攻撃魔法、水龍弾でオークを倒してください』

「詠唱は？」

『必要です』

「おっけー！ 水の精霊よ、可憐なる精霊よ、その身を水龍と化して我が敵を喰らえ。水龍弾！！」

水の龍がオークに襲い掛かる。

無詠唱で魔人の腹を食い破った魔法だ。

魔人の危険度は最高の S ランクだという。C ランク程度のオークが 10 体いても、フル詠唱の水龍弾に耐えられるわけがない。

10 秒もしないうちに、オークは全滅した。

濃い血の匂いが辺りに立ち込める。

「うっ。これは……、ちょっとキツイ」

角兎の時は跡形もなく燃え尽きていた。

こうして俺の魔法に食い破られた死体を見ると、吐き気を催す。

『申し訳ありません。急ぎでしたので、対処を誤りました。次回からは敵魔物の死骸を残さないようにします』

「急ぎ？　なんで？」

『オークは獲物を狩る時でもなければ森の中で群れることはほとんどありません』

オークの獲物って言うと、この世界のヒトってことか。

「襲われていたヒトがいるんだ」

『だと思われます。どこか、そのあたりに——』

「あ、あなたが、オークたちを倒したの？」

背後から声をかけられた。

振り返ると、金髪の少女がいた。

大きな目。美しい金色の髪。
肌は透き通るように白く、綺麗だった。

肩くらいまでの長さの金髪から少し尖がった耳が見えている。

絶世の美少女だった。

元の世界じゃ、アイドルでもここまで可愛い子はほとんどいない。

エルフってやつかな？

『耳の長さが短いので、ハーフエルフだと思われます』

そうなんだ。

「ねえ、聞いてる？ 私の言葉、通じてるよね？」

「ああ、ごめんなさい。言葉は分かりますよ」

こちらの世界の人族とエルフが使う言葉が違うかどうかは分からない。でも俺たち異世界人にはパッシブスキルに“言語理解”っていうのがある。それにより、この世界で言葉に困ることはないらしい。

「あなたがオークを倒してくれたの？」

「ええ。全部倒しました」

「良かった。助けてくれてありがと。オーク1体くらいなら私でも何とかあったんだけど、後から10体も出てくるからどうしようもなくて。私が木の上に隠れても、あいつらこの辺から移動しなくて困ってたの」

1体はオークを倒したんだ。
その華奢な見た目で、凄いな。

やっぱり異世界って、魔法が使えるから見た目で判断するのは良くないらしい。

「ここを通りかかったら襲い掛かってきたので倒しただけですよ。それで助けられたなら運が良かったです。俺、ユーマって言います」

「私はリエル。改めてお礼を言わせて。本当にありがとう」

オタクの俺は色々な異世界ものの漫画やラノベを読破している。

人族には敵対心剥き出して話しかけてくるエルフが登場する作品もあったが、この世界のエルフは人族に友好的らしい。

ハーフエルフだから、リエルが特別って可能性もあるかな。

なんにせよ、こんな美少女からお礼を言われて嬉しくないわけがない。

さっそく異世界無双が出来ちゃった。
これは田中たちに自慢しなきゃ！

「あの、出会ったばかりで悪いんだけど。ユーマ、私とこの先の街まで一緒に行ってくれないかな？ またオークとかに襲われるのは嫌だから。街についたらご飯を御馳走する。それじゃ、ダメかな？」

リエルが不安そうに聞いてきた。

こんなに可愛い子をご飯と一緒に食べてくれるんですか？

一緒に街まで行っても良いんですか！？

それって、実質デートですよね！？

『どちらかという、護衛任務ですね』

アイリスの冷静なツッコミが入った。

でも良いんだ。
俺の中では勝手にデートってことにしておく。

「いいよ。街までリエルを街まで送ってあげる。ご飯の件、よろしくね」

「ユーマ、ありがと！ よろしく!!」

古城に置いてあったお金やアイテムなどは全て消滅していた。だから俺は今、無一文なんだ。そういう意味でも、ご飯を食べさせてくれるというのに護衛任務を断る理由がない。

「それじゃ、行こ！」

リエルが俺の手を引いて歩きだした。

は、はじめて女の子と手を繋いでしまった。

『祐真様。進行方向が逆です』

えっ？

「リエル。向かってる街って、どっちにあるか分かってる？」

「んー、わかんない。でも多分こっちでしょ」

……そうか。

方向音痴タイプだったか。

可愛くてオークを倒せるほど強い。

初対面の俺にも気さくに話しかけてくれる。

そんな完璧美少女にも欠点があった。

「ほら、早く行かないと。暗くなっちゃう」

「街はそっちじゃないよ」

「えっ、そうなの？ ユーマ、道案内できるんだ」

俺は案内できない。

街に行ったこともないから。

アイリスに導いてもらうだけ。

てことでアイリスさん。

よろしくお願ひしまーす！

『……嫌です』

えっ。なんで？

『可愛い女の子と手を繋いで鼻の下を伸ばしているんですから、祐真様はこのまま森から出られない方が幸せなんじゃないですか？』

もしかしてアイリス、嫉妬してる？

『してません』

絶対してるでしょ。

『嫉妬なんかしてません！ 私は、ただのスキルです!!』

ただのスキルなら、怒って叫んだりしないよな。

俺はその後、なんとかアイリスをなだめ、リエルと共に森を抜けた。